

特集にあたって

「観光」という言葉には、明朗で、ワクワク、ドキドキとした響きがあります。

「易経」の「観国之光」が語源とされる「観光」は、古来より地域活性化の大きな役割を担ってきました。観光の振興は、交流人口の拡大と、経済効果をもたらすことはもちろん、地域住民が、自分の住んでいる地域を見つめ直し、新たな地域資源を見出し、地域の宝として磨きあげることにより、地域の誇りの醸成にも繋がるなど、様々な可能性を持っています。

日本を訪れる外国人旅行者数が2016年に2,400万人を超え、更に増大が見込まれる中、各地域でも、インバウンドへの期待が高まっています。平成28年3月に策定された観光庁の「明日の日本を支える観光ビジョン」では、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年に訪日外国人旅行者数を4,000万人、2030年には6,000万人を目標とするなど、官民一体となってインバウンド対策の強化に取り組もうとしています。

愛媛県においても、平成28年の県外及び県内観光客総数が推計で27,455千人と過去最高数となるなど観光面は好調であり、今年度には、「道後温泉別館 飛鳥乃湯泉」の開業、愛媛版DMOの設置、韓国との新規航空便の就航決定など明るい話題が相次ぎ、また、2年後に東予東部地域振興イベントが計画されるなど、更なる観光振興に向けた動きが活発化しています。

今回のECPRでは、観光について様々な視点から考察し、今後の地域政策・地域づくりを展望する契機とするため、文化遺産、インバウンド、ニューツーリズム、四国新幹線、次世代育成、DMOといった愛媛を取り巻く観光に関するキーワードから、各方面でご活躍の方々に切り込んで頂いております。また、特別寄稿として、長らく愛媛県の観光振興計画に携わって頂いた溝尾良隆先生に「愛媛の魅力を活かした観光まちづくり」と題し、愛媛県のこれまでの観光推進と今後の観光まちづくりについてご執筆を頂いております。

今年度、本県では、「ディステーションキャンペーン」や、「えひめ国体」などの追い風を受け、各地の観光地も賑わいを見せておりますが、今後更に激化する地域間競争の中でインバウンドや交流人口の拡大、個を大切にしたい観光への対応など、多様な観光の在り方が問われています。

観光振興は、地域の未来を拓く重要な役割を担っています。観光をキーワードに未来を展望し、これからどのようにあるべきか、それぞれの地域の特徴や魅力を活かした新たな挑戦へのご参考として、本誌をご活用頂ければ幸いです。

(公財) えひめ地域政策研究センター

所長(専務理事) 山本 司